

THE WEEKLY NEWS OF FUTTSU-CHUO

ロータリー：変化をもたらす



少年・少女の夢再び

Rotary : Making a Difference

RI 会長 イアン H.S. ライズリー

2017~2018

富津中央RC会長 石渡 鋼

国際ロータリー 第 2790 地区 富津中央ロータリークラブ 創立:1966/10/13 加盟承認:1966/12/12
RI D2790 FUTTSU-CHUO ROTARY CLUB Organized : Oct./13/1966 Chartered : Dec./12/1966

No.2496 第5回例会 2017. 8. 5 晴

会場 マザー牧場ジンギスカン食堂 点鐘 18:00



点 鐘：石渡 鋼 会長

進 行：神子勝美 親睦担当部長

お客様：藤倉様 藤平様 山下令嬢御孫二名様

会員夫人六名様

会長挨拶

石渡 鋼 会長



皆さんこんばんは。今日は本年度初の移動例会ということで今年もここマザー牧場にお世話になりました。38名の参加という大勢の参加を得まして賑や

かに、始めることが出来ありがとうございます。

毎年恒例の行事となりましたこの催しですが、本年度開始早々3名の方が新しく入会されたばかりですので、今夜はその方々の入会を祝しての歓迎会を兼ねたいと思います。3名とはすでにお馴染みとなっております石井智信さん、椎熊邦弘さん、鈴木俊吉さんの方々です。今夜のイベント花火のスターメインは最初が石井さんの為、次が椎熊さんの為、その後が鈴木さんと続く手筈になっております。最初が上がったら、他のお客様もおいでですので心の中で「ともちゃんー」と続いて順に「熊さんー」「しゅんちゃんー」とお叫び戴き祝福したいと思います。

また本日はお客様として、藤平様と藤倉様をお迎えています。会員各位にはお二人に入会の更なるアプローチをお願いします。また女子会の皆様には今年も変わらぬご協力をお願いするところでありまして、台湾式歓迎の言葉の常套句ではありません

〒293-0043 富津市岩瀬 841-3

いち川旅館 Ichikawa ryokan

841-3 Iwase Futtsu-shi Chiba-ken,

Tel. 0439-65-0177 Fax. 0439-65-0178

URL <http://www.futtsuchuo-rotary.org>

Mail home@futtsuchuo-rotary.org



が、「歓迎本社青春美麗的大方夫人及小扶輪臨添無限光彩」。というわけで山下会員の娘さんとお孫さんの小扶輪も初のお目見えです。

さあこれより飲み放題、食べ放題の始まりです、どうぞ楽しいひと時をよろしくお願い致します。

幹事報告・乾杯

平野安照 幹事



幹事報告

幹事報告は、8月17日(木)の例会時に、まとめて報告させていただきます。

乾杯挨拶

皆さんこんにちは。最年少者に乾杯の発声を任せるとのご指名ですので、僭越ではございますが、ご挨拶させていただきます。

本日はご多忙な中、マザー牧場納涼夜間例会にご参加いただき、誠にありがとうございます。美味しい料理と美しい風景で、楽しい一時をお過ごしいただけたらと思います。乾杯！

スナップ



マザー牧場まきばゲート



山下“じじ”



入会候補の藤平様



同じく藤倉様、手前は山下御令嬢母子



乾杯



花の?十代



「ごごナマ」NHK



お客様のご接待



著述家、芸術家、組合長、フィナンシャルリスト



ソフトなお人柄をソフトフォーカスで



緩み顔のジイ



大きな商談が纏まりそう



花火でお開き

前期卓話

「補陀落渡海」の世界

榎本守男 会員

例会プログラムの埋め草として、いつでも卓話が出来様に準備をしていましたが活発な例会が続いたおかげで、今日の例会まで出る幕はなく「補陀落渡海」はあわや不良在庫になるところでした。予告編は何度か例会でやらせていただきましたが、今日はSAの配慮で時間を15分頂きましたので卓話をします。

今日の話の舞台は紀伊半島です。頭の中に紀伊半島の地図を浮かべてください。紀伊半島は三重県と熊野川を県境とした和歌山県そして内陸の奈良県の3県で構成されています。年配の会員ならご存知だと思いますが串本節(♪こは～串本向かい～大島、仲を取り持つ巡航船♪)に歌われている串本・紀伊大島と三重県境の新宮市との中間に位置する熊野信仰の聖地・那智勝浦の話です。今日のタイトルの「補陀落渡海記」は、井上靖(1907年～1991年、歴史小説家)の短編小説です。

私が、この作品を読むきっかけになったのは、2015年の読売新聞日曜版の名言巡礼の欄に“浄土より現世への未練”との見出しが目に留まったからです。

補陀落渡海(ふだらくとかい)という営みが、古代から近世にかけて実際に行われていた事を、現代人はどう考えるのだろうかと問題提起されていました。この機会に会員の皆さんも「生について」考えていただければ幸いです。

那智の浜近くにある補陀洛山寺は「補陀落渡海」の出発点だったことで知られています。「補陀落渡海」とは、補陀落を目指して船出することです。「補陀落」とはサンスクリット語の「ポタラカ」の音訳で、南方の彼方にある観音菩薩の住まう浄土のことをいいます。宮殿をポタラ(補陀落)宮と呼びました。日本においては南の海の果てにある補陀落浄土を目指して船出することを「補陀落渡海」といいました。那智の浜からは25人の観音の信者が補陀落を目指して船出したと伝えられています。平安前期(868)～江戸中期(1722)まで25人いたそうです。

井上靖の『補陀落渡海記』には、金光坊の渡海

にまつわる事が描かれています。高僧の崇高な境地を描いた説話ではなく、金光坊のあまりに人間らしい物語なのです。

これより目を閉じて気楽にお聞きください。金光坊は、小坊主として補陀洛山寺で修業をしていました。その当時、寺の住職は61歳の11月になれば補陀落渡海に出帆するという慣わしになっていました。

金光坊は、何人もの先輩住職の渡海に立会っていました。自分にとっては、まだ先の事と渡海の事など考えたこともありませんでした。しかし、時の流れは早く、その時を迎える齡が近付いたのでした。

金光坊は、渡海上人になることは、仏に仕える身としての一種の憧れがあったものの、現在の自分ではまだ高い信仰の境地へは到達していないが故の心の葛藤がありました。

渡海の時期を延ばしたいが、今年の渡海を信じている者が沢山いて、今更言い出せない。渡海時期を訂正することで観音に対する信仰に傷をつけると思うと余計に言えないのでした。もしそうなったら死んでも罪は消えないと思っていたのです。

渡海を発表することで、金光坊は寝ても覚めても渡海者の顔が浮かぶようになります。自室から出ず、経を読む毎日が続きます。金光坊は渡海に疑念を持ちつつ、決意が定まらぬままに周囲から追い詰められて渡海の日を迎えたのです。

金光坊は、10月に入ると自分が見送った7人の渡海上人の顔を思い浮かべる様になりました。信心深い補陀落渡海者としての持つべき悟りの顔があり、自分もそういう顔で渡海したかったからです。1ヵ月を切ると、今までの上人の誰の顔でもいいから、それになりたいと思うようになりました。訪問者が来ても何も話さず、何の用で来たのか考えられない日が続きました。 — 以下後号 —

出席報告

平川恵敏 出席担当部長

区分	会員数	出席	欠席	MUp	出席率
今回	32/31	31	0		100%
前回	32/29	23	6		79.31%
前々回	32/27	19	8		70.37%